

ふらぐめいかー・ふらぐるすと

保坂歩

シルバが最後に吠えたのは七月十日の朝だった。

シベリアンハスキーのシルバは、俺がまだ小学生の時から寝食を共にした弟のような存在だった。しょっちゅう遠吠えをするので近所の住人にもよく注意されたが、今年に入ってからめっきり弱ってしまい、なかなか犬小屋の外にも出てこなかった。

フリスビーが大好きで、投げてやればすぐに追いかけていくのだが拾ったフリスビーは必ずどこかに捨ててくる。お前は拾うことより捨てる方が楽しみなのか？ と尋ねるとハフハフご機嫌そうにすり寄ってくる。勿体ないので、フリスビーは木の枝で代用するようにした。忠犬というには悪戯が過ぎる、愛すべきバカ犬だった。

そのバカ犬のふさふさしてペルシャ絨毯のように滑らかだった毛並みが、日に晒した畳みのようにささくれていくのは見ていて耐え難かった。もう何日かすれば俺の高校も夏休みに入り、もう少しだけ一緒にいられる時間が増えただろう。けれどシルバの老いた体には、学生の都合に合わせてくれるほどの余裕はもう無かった。

その日意識が混濁していたはずのシルバは、夜明け前に突然起きあがって月に向かって吠え出した。何かを訴えるでもない――何というか、「こんな時間にごめんね」と謝っている感じの、強い悲哀は無いけれど申し訳なさそうな。そんな遠吠えだった。

俺と同居中の叔父が目を覚まして駆けつけたころには、すでにシルバは横たわって息を引き取っていた。たたき起こしたくなるほど、安らかな死に顔だった。亡骸は叔父と二人で、家の庭に埋めた。

手を合わせてシルバの冥福を祈りながら静謐を孕む朝の日射しを見上げると、一陣の風が俺の体を通り抜けていった――気がした。

そして、背後で空に向かっていく足音が聞こえた。

今のがシルバの魂なら、希望ある未来へ飛んでいけよ、と柄にも無いことを祈ってみた。

*

その年の夏休み、俺は引きこもった。叔父が話しかけても返事は無い。ただの屍。

俺が住むA県A市は日照量が極端に少ない町だが、それでも真夏のうだるような日射しは気力を奪っていく。茫洋と適当に、積んだゲームを消化していくだけの日々を過ごす俺を見て叔父も呆れていたが、強く注意してくることも無かった。

両親を失って、さらに弟であるシルバを失った俺の心境を察してくれたのかもしれないし、語るべき言葉が無いのかもしれない。親の顔なんて覚えてないし別にいいんだけどさ。

W不倫で失踪したという、父方にも母方にも極めて不名誉な俺の両親。残された俺を哀れんで引き取ってくれた叔父は、俺の父の、妹の夫だ。血の繋がりは無い。

叔父は叔父で、早くに俺の父の妹――奥さんを病気で失ってしまったため、家族のいない家庭が耐え難かったらしい。残り者が身を寄せ合った家庭、と言うとネガティブシンキングが過ぎるかもしれないけど、別に俺は過不足は感じていなかった。

けれどもやっぱり、一緒に成長したシルバの死は堪えた。どうにもならないのに、どうしても

毎日シルバのことを考えてしまう。出歩く気もせず、行動も起こさなかった。

勿論、何ら面白いイベントも発生せずに夏休みは終わった。下らない青春。

学校が始まって鬱々とした気分は抜けず、俺は授業を抜け出した。

こんな気分で古文の教師のハゲ面は見たくない。西日を照り返されて、体感温度が数度は上がる。エアコンの無い教室では地獄だ。

ふらふらと特に理由も誘導も無く、俺は校庭に向かった。こっそり持ち込んだ携帯ゲーム機で、好きなRPGでもプレイして気分を変えたかった。作業的なゲームほど良い。

俺は人目を忍ぶために、校庭の隅に置かれた、無駄にでかい高校設立記念の石碑の裏に隠れようとした――のだが。

「な、何だお前？」

びくりと後ずさった。石碑の裏には、先客がいた。

石碑の裏にすっぽり収まる程、小柄な少女。上はネクタイシャツに下はスパッツ一枚、という身軽だかなんなのか分からない、部屋着のような格好。黒髪のショートカットは少年のような印象だが、顔立ちがあまりにも整いすぎている。睫毛も長い。

その細い手には、彫刻刀が握られていた。がりがりと一心不乱に、汗をかきながら石碑の裏に何やら文字を刻んでいる。理解しがたい、狂気じみた光景だった。

「……もうちょっとだから、邪魔しないで欲しい」がりがりがり。

こちらをちらりと見た少女は、特に警戒もせずにさらりと告げた。

耳に残るウィスパーボイスに、俺は聞き覚えがあった。

「お前、四方田邑(よもだ ゆう)か？」

「ん？」

少女は彫刻刀を持つ手を止め、怪訝そうに俺の顔を睨んでくる。

「そうだけど……？」

険しく眉をしかめたその表情は初めて見るけれど、やはり俺はその少女を知っていた。

四方田邑。中学生時代のクラスメイトで、別々の高校に進学したはずだ。クラスメイトではあったけれど、会話は殆ど交わしたことが無い。俺の知る四方田邑は、黒髪ストレートのお嬢様系、正統派ヒロインという感じの日本的な美少女だった。クラスの内外に人気があり、休み時間には見物人が来る程で、俺如きは近づくことも許されない感じだった。

その四方田が――。

「何故俺の高校の石碑を、がりがり削っているのでしょうか」

懇切丁寧に、敬語で訊いてしまった。石碑の裏面が、表に刻まれた全く暗記していない校歌以上の文字数に埋め尽くされようとしている。

「未来に、情報を残しているんだ」がりがりがりがり。

きっぱりと答えた四方田は、彫刻刀で再び文字を掘り出した。

「……………未来？」

やばい。何故か分からないが、しばらく見ない間にあの儂げな美少女は壊れていた。

ずばり言うと電波さんかメンヘラ。なんか口調も昔と比べて変になってるし。

俺が元クラスメイトだってことは、気づいてもいない様子だ――いや、最初から覚えていないのか。接点が無かったんだから。

横目で彫っている文字を見てみたが、何とも出鱈目だ。こんな文字は見たことが無い。

少なくとも、日本語や英語では無い。世界史の教科書で見た楔形文字かと思った。

「ちょっと、この辺りの水源の位置を、未来に、ね……分かるだろ」

当然のように四方田は告げる。

「全然分かんないんだけど」

がりがりがりがりがり。答えずに四方田は、細い腕を懸命に動かす。

異状極まりない光景だと思いながらも俺は、四方田から飛び散って煌めく汗から目を離せなかった。妙に絵になる。

「こらー！ オメェら、授業中に何やってんだー！」

校舎の方から、野太い叫び声が近づいてきた。A校のナマハゲの異名を持つ、保健体育の教員だ。どこで買ったのか、えび茶色という悪趣味なジャージ姿(一張羅)で走ってくる。

「おい四方田、逃げないと捕まるぞ？ 結構厳しいんだよ、ここの校則」

校則の問題じゃない気もするが。一応石碑は公共物だし、器物損壊罪に当たるだろう。

「ちょっと待って、後少しだから……」

四方田はナマハゲの怒声に狼狽えながらも、彫刻刀を握る手を休めない。

「後少しって、どれくらいだよ？」

「後……三行ぐらいかな」

「間に合うわけねーだろ！」

俺は四方田の手首を強引に握って、勢いよく立たせた。ずるずる引きずるように校門へと走る。四方田の瘦躯は、羽根でも生えているかのように軽かった。

「うわ、ちょっと、離して！ まだ掘り終わってない！」

「その前にお前の人生と、俺の学生生活が先に終わるっつーの！」

ぎゃーぎゃー叫ぶ四方田を怒鳴りつけて、振り向かずに俺は手を引く。

四方田はぷっくり頬を膨らまして、悔しそうに走り出した。

俺は何をやっているんだろう。共犯でも何でもないのだから、四方田を突き出せばいい。ただ――家族を失った後に人を見捨てるのは、気が引けた。

俺達は十分ほど走った所で、目についたファーストフード店に入った。

四方田は凶器にしか見えない彫刻刀を握りしめたままだったので、すぐに仕舞わせる。

「そのザマじゃ、どこ行っても捕まるだろーが」

言い聞かせたが、全然納得出来ていない様子だ。この国の警察機構をなめないで欲しい。

不審そうに俺達を見比べながらもスマイルを忘れない、嫁に行き遅れた感のある妙齢の店員からポテトとコーラを二人分購入する。この隙に四方田が逃げ出さないだろうか。

不安だったが四方田は大人しく自分のトレイを持って、とことこ俺の後ろを着いてくる。

一安心して、人目に触れにくく外の様子を見やすい、二階の窓際席に座ることにした。

四方田は俺を睨みながら、もそもそとポテトを食べ始める。石碑への彫刻作業を中断されたことを、相当恨めしく思っている様子だ。眉は寄せながらもポテトを食べる手を休めない所を見ると、相当腹が減っていたらしい。

「……余計なことをしてくれたね」

ぼそりと四方田が呟く。

「文句を言いたいのは俺だ。顔は見られてないと思うけど、バレたら俺もやばいんだぞ」

良くても停学だと思う。手を握って逃げてきてしまったのだから、言い逃れも利くまい。

「それぐらい、未来に比べれば小さなことだよ」

仏頂面で、またも訳の分からんことを四方田は抜かした。

生粋の不思議ちゃんなのか、こいつ。

「古谷幹（ふるや みき）だったね。君はそんなにお節介だったのか？」

四方田は、訝しんでいた俺を、突然フルネームで呼んだ。

「……俺の名前、覚えてるのか？ 中学の時は、喋ったことなんか無かっただろ」

「中学？」

四方田は不思議そうに首を傾げた。

「クラスメイトだったから覚えてたんじゃないのかよ？」

「……違う。でも古谷幹、君のことは、良く……覚えている……みたいだ」

呟く四方田の眼がせわしなく、くるくると宙を泳いで回る。遠い記憶に想いを馳せているかのようだが、俺達が中学を卒業したのはつい数ヶ月前の出来事だ。

「どうして、私は、君を覚えているんだろ？」

「……そりゃこっちのセリフだ」

「むー……？」

四方田は悩ましげに、ふりふりとメトロノームのように首を降り続ける。そんな疑念をぶつけられても答えようが無い。相手の記憶に焼きつくようなことをしたはずが無いし、そんな記憶があったとしても責任は持てない。

しかしながら、名前を覚えてもらっていたことに、俺が若干の喜びと矜持を感じてしまったのも事実だ。奇矯な発言が続くとはいえ、四方田はかつてのクラスのアイドルなのだ。

無為でしか無かった夏休みを過ごした受動的な俺に、ようやくフラグが訪れたのか？

「まあいいや。君の記憶なんてどうでもいい」

どうでもいいそうだ。

「重要なのは、過去じゃない。未来なんだ。未来に情報を残すことなんだ」

「またそれかよ……何だよ未来って。進学先に悩んでるのか？ 一年の内からご苦労だな」

「違う……食べ終わった。ごちそうさま。それじゃ」

すっかりポテトを平らげた四方田は、トレイを持ってそそくさと席を立とうとする。

「おいおい、ちょっと待てよ！」

俺はまた、四方田の細い手首を強引に握る。

「もうお腹いっぱいだよ。残ったコーラはあげる」

「残りもののコーラなんていらねーよ。助けてやったんだから、もう少しちゃんと説明しろよ。

未来とか何とか、分かるようにさ」

四方田は煩わしそうに腕を引こうとしているが、さすがに男の腕力からは逃れられない。

周囲の視線が背中に突き刺さるのが分かる。俺は別れ話の末、嫌がる彼女を引き留める往生際の悪い男といった所か。まあ妥当な解釈だろう。

「……面倒だなあ君。助けてなんて私は頼んでないし、私の話なんてどうせ信じないよ」

四方田は諦めて、腕の力を抜いた。

「訊いてみなきゃ分かんねーだろ」

どうせマトモな話は期待していない。ぶっちゃけ興味本位だ。

「分かったよ。とりあえず、四方田って呼ぶのはやめて欲しい。名字で呼ばれるのは堅苦しくて嫌いなんだ。ユウ、でいいよ」

「分かった。ユウ、だな。俺は幹でいい」

名前で呼んで下さい、と美少女に言われて嫌がる男子高校生などいない。

という訳で接点の無かった元同級生の四方田・改めユウと俺は、名前を呼び捨てで呼びあう程度の友人関係に昇格した。このレベルに達する難易度は周知のことと思う。

「では」と居住まいを正して座りなおしたユウは、真剣な眼差しで。

「私は、来世の自分とリンクしたんだ」

と、告げた。

「……………来世？」

やはりというか期待以上というか、電波全開の発言だった。

「うん。私は、遠い未来ではカマルという名前の少年なんだ。私の心は、そのカマルの意識と繋がってしまったらしい。眠っている間だけね」

はきはきとユウは述べる。良くも自信満々に、まあ。

「カマルがいる未来の世界は、荒廃しきっている。人間の数が極端に減っているんだ」

「……世界が崩壊しちまってるのか？ ターミネーターとかの核戦争後の世界みたいに？」

とりあえず、適当に話を合わせる。

「そう、そんな感じ。世界はとても住みにくい。水を見つけるのも、食べ物を見つけるのも一苦

劣で、悪魔のような疫病が流行っている……ターミネーター見たこと無いけど」

「見ておけ。2までは傑作だから」

「参考になるなら見る」

ユウは大きく頷く。薦めておいてアレだが、何の参考だ。

「お前の言う通りなら、この星の未来は絶望的なようだな」

「そうでもない。人間は少なくなったけど、『テセウスの乗船者』達が人を導いている」

またキテレツなキーワードが増えた。

妄想というより行き当たりばったりの中二病なんじゃないか、こいつ。

「テセウスって何だよ。宇宙人でも襲来したのか？」

「違う。テセウスの乗船者達は、人類の中から新たに生まれた希望に溢れる者達だよ。彼らは特殊な能力を生まれつき持っていて、その力で人を助ける」

「……ターミネーターに、能力バトル要素が入ってるのか」

「能力バトル？ それは何？ 参考になる？」

口が滑ってしまった俺に向かって、ユウは身を乗り出して訊いてきた。顔が近い。

「あー……まあ、マンガとかラノベとかでよく出てくる、特殊能力者が互いの力で戦ったりするジャンルだな」

何故に俺は、こんな所でオタク文化をレクチャーしているんだろう。

「ふうん、マンガでもそういうのがあるんだ。今度読んでみる」

うんうん頷いて、ユウは関心している。いや、良く考えれば知らないはずは無い。ガキ臭い妄想には大抵オリジナルがある。意識的にしろ無意識的にしろ、ユウもそこらの作品からパクっているはずだ。ネーミングとか。

「そのテセウスとかがってのは、どういう意味なんだ？」

「さあ。意味は知らない。カマルが生まれた時には、すでにその名前があったから」

しらを切るか。まあ、カタカナ語はそれっぽく適当につけても様になるものだ。

「『乗船者』って響きは、多少凝っているけどな」

「は？」

またしても口が滑ってしまった。

「い、いや、何でもない。その何とかの乗船者は、能力バトルよろしく殺し合いでもしてるのか？」

「それは、今のところは無い」

ユウはきっぱりと告げてかぶりを振る。

「彼らは考え方の違いはあるけれど、殺し合ってはいない」

「へー。能力があるのに戦わないのか。面白い発想……いや、立派なもんだな」

「危険なんだ。彼らの能力は、必ず他者の生死に直結しているから」

何とも物騒で、抽象的な言い方だった。

「破壊力がすごすぎる、とかなのか？」

「破壊に繋がることもあるけれど……私が会った中には、『見ただけで死ぬ絵』を描ける者が

いた。『触れるだけで死ぬ指』を持つ者もいた。そんな者達が争えば、どうなる？」

「相打ちか、颯ごっこだな」

「その通り。不毛だろう？ 能力は自分自身には使えない、というカセもある。彼らは互いに能力が干渉した場合の危険性を考えて、早くから戦いを禁じたんだ」

筋は通っているが。人間がそこまで、思い描いた理想通りに動けるだろうか。

「野心に駆られる奴も、中にはいるだろ？」

「それが、いない。普通の人間にはそういう汚い考えのもいるけれど、彼らは一一何というか、人が持つ希望を心から信じている。ずっと昔から、生まれる前から、人という種を信じていたみたいだに」

「ご都合主義な世界だな。そんな展開じゃ面白味が……」

またしても意見が口に出てしまったが、ユウは。

「マンガや映画と一緒にするな。幹」

先にぴしゃりと言ってきた。参考にはするくせに、マンガや映画と自分の妄想をくっきり区別しているらしい。意外と理性的で合理的な妄想だ。

「それでえーと、カ、カマ……？」

「カマル。未来の私、生まれ変わった私」

「そのカマルがいる未来の世界はどうして滅んだんだ？」

「さあ。知らない」

本日二日目の『さあ』。所々、ユウの合理的な妄想には所々虫食い穴がある。この手の妄想や中二病は、世界が滅ぶ理由にこそカタルシスがあるのでは無いのだろうか？

偏見かもしれないけど、神の審判とか悪魔の侵攻とか、それっぽいやつが。

「本当に知らないのか？」

今考えてもいいぞ、と口に出しかけたがさすがに黙っておいた。

「知らない。記録がどこにも無いし、誰も覚えてない……分かっているなら、私ももうちょっと、具体的な努力が出来ると思う……」

ユウのウィスパーボイスが、急に尻すぼみになった。鬱のスイッチが入ってしまったようだ。鈍重そうに肩を落として、がっくり俯いている。

「あー……ええと、知らないのは、お前やそのカマルのせいでは無いだろ？ 考えすぎても仕方ないって」

俺はユウの妄想を慰める。

「うん……そうだね。ありがとう、幹」

口の端を上げて、ユウは諧謔的な笑みを浮かべる。複雑な人生経験を顔面に刻んだかのような、同年代の少女があまり浮かべない表情だった。

思わず見取れてしまって、俺はちょっと後悔した。何の因果でファーストフードで妄想長話をする少女を、慰めながらドギマギしなければならんのか。

「でも、大丈夫なんだ。私はへこたれない。未来にはスズメがいるから！」

むくりと顔を上げたユウは、またも謎の言葉を口にした。今度は鳥かよ。

「現代にだってスズメはいるだろ？ そこら中の電柱に。未来にはいないのか？」

「そのスズメじゃない！ 未来のスズメは女の子だ！ 私が――カマルが命を賭けて守っている女性だ！」

力強く剛胆に、ユウは店内に響き渡る大声を発した。周囲の視線がもう激痛。

「そ、そうなのか……女の名前なら先にそう言えよ」

「スズメは、私が知る中でも、最も優しくて、けれども弱い、テセウスの乗船者の一人なんだ。スズメはね。どんな酷い怪我をした人間でも、立ちどころに癒してしまえる。不条理な未来の世界の死を、他人から奪ってしまえるんだ」

「ああ、治癒能力ね」

軽く言い放ってしまった。ありがちだが、それも生死を扱える力に入るのか。

能力バトルにおいては地味ながら堅実な属性だろうが、人を殺すよりはずっと実利的で、便利な能力とも言える。実在するならば、だけど。

「私は――カマルは、スズメと会って初めて、世界に希望を抱いたんだ。彼女を守れば、人が理不尽な日常に絶望せずにすむんだよ。スズメの側に、ずっといたい……ずっと……」

ユウはひたすらに熱弁する。爛々とした目で滔々と、我が事のように誇っている。

「つまりお前は来世では少年になって、女の子に恋をしていると。そういうことか？」

「……恋？」きょとんとされた。

「だろ？ 今まで気づかなかったのかよ、まさか？」

俺は段々と、加虐的になってきていた。

「恋………そうなのかな？ そうかもしれない……」

ユウの顔に紅葉が散る。

真っ赤なユウは口を真一文字にして、またしても俯いてしまった。

「スズメは、あんなすごい力があるのに、私にしか心を開いてくれないんだ。だから、その……私がいつもいて、守ってあげないと。自分の傷は癒せないから……」

もごもごとユウは口ごもる。俺は呆れを通り越して、感動を覚えていた。

妄想上の世界に、妄想上の能力。そして、自分と同性の、妄想上の彼女。

こいつの頭の中は、どこまで合理的に歪んでいるんだろう？

「わ、私は一日数時間ぐらいしか、カマルとリンク出来ないから……スズメにはこの現代に生きる『ユウ』のことは話してないんだ……不安にさせたら、その……可哀想だし……」

恥ずかしそうに縮こまっているユウの姿が、また可憐だ。そう感じる俺も病んでいるのだろうか。メンヘラに惹かれていたら身が持たないとは、分かっているつもりだけれど。

「……で、その荒廃した未来の世界と、死を操る能力者と、お前の生まれ変わりのカマルとスズメちゃんの話は、何とか理解出来たけども」

まあ、内容を理解は出来るが共感はしていない。単語を並べただけで笑いそうになる。

「そう？ 良かった」

ユウは顔を赤らめたまま、嬉しそうに俺を上目遣いに見つめてくる。

何だこの小動物は畜生。

「そ、それと俺の高校の石碑をがりがり削る行為と、どう関係あるっていうんだ？」

声が上擦ってしまった。

「色々試してみたんだけどね。この先、滅んだ未来に至る歴史そのものは、どうやっても変えられないみたい。この時代で何をやっても、何をしても、決定的な変化は未来では現れない」

「ほー。難しいもんだな」

決定論とかいうものか。予定された結果は、どうあがいても変えることは出来ない。

「未来では、過去の世界がどんな地形で、どんな文化があったのかという歴史さえ、殆ど失われてしまった。水源になるような場所はどこか？ どんな植物が食べられるか？ 病気の治し方は？ そんな小さなことも、未来には伝わっていない」

「そこまで徹底的に壊れるのかよ、人間社会が」

「とっても悲しいことだけどね……でも、歴史は変えられなくても、未来に少しぐらいは情報を残してあげられる。さっき言ったような些細なことでも、未来ではとっても有益な情報になる」

ユウの目的が、分かりかけてきた。

「じゃあ、あの石碑に刻んでた、変な碑文みたいなのは……まさかお前が、未来に託した『生活の知恵』ってやつなのか？」

「そう。私がカマルとして未来を歩いた時に、あの石碑と殆ど同じ形の物を見つけたんだ。現代であの石碑に情報を刻めば、私以外の誰かがあれを見つけてくれるかもしれない。賭けみたいなものだけど……でも、人が生きるちょっとした糧ぐらいにはなるかもしれないだろ？ 文字は未来で使われてる物だし、現代人には気づかれない」

俺は唖然としていた。そんなに小さすぎて、実りの少ない努力があるだろうか。

「……お前、ずっとそれを実行してるのか？」

「うん。未来でスズメと一緒に世界を眺めて、こっちでは情報を残してる。ずっとね」

「毎日か？ 学校はどうしてるんだ？」

「ほぼ毎日だよ。学校は……あんまり行ってない。親は怒ってるけど、未来に比べれば学校も、勉強も小さなことだろ？」

決然と、淡々と、ユウは述べた。

この奇妙な部屋着のような格好も、動きやすさを優先したのだろう。言葉遣いが男っぽいのは、来世のユウであるらしいカマルの性格や口調がフィードバックしているのか。ユウとカマルは渾然一体となって、溶け合ってしまった。

そういう――妄想なのだ。

俺はユウの顔を見つめて、沈思黙考した。

「……どうした幹？ やっぱりこんな話は、信じられなかった？ それが当然だとは思うよ。親も友達も、来世の自分と心が繋がるなんて話は……」

ユウは、陰りのある顔でこちらを見つめ返す。

「信じるよ」

口が滑った。これまで以上に盛大に。

「俺は信じる。ユウが言ったこと、全部」

「え……？」ユウはまたきょとんとした。

信じるわきゃ無い。

性格が悪いと言われても仕方がないが、このときの俺の精神は夏休みの延長上にしか無かったのだ。無為。適当。失った家族のことを忘れられる、ほんのちょっとの馬鹿らしい遊び。妄想メンヘラ系僕っ娘という扱いの困る属性ではあるが、それでも相手は絶世の美少女だ。こんなフラグは二度と立つまい。

「話は分かった」やけくそ紛れの暇つぶしに。

「俺も手伝おう——人類の未来のために。お前と、そのスズメちゃんのために」

呆けていたユウは、がたんと椅子をはね飛ばして、立ち上がった。

「ほ……本当か？ 本当なのか幹——!？」

素晴らしく可愛らしい、アイドル然とした笑顔がそこにあった。

罪悪感は無くも無いが、ま。これも経験ってことで。

そんなこんなで、俺とユウの奇妙な『未来へのフラグ立て』の日々が始まった。

しょうもなく滑稽な一夏の非日常。さほど重くは考えてはいない。考えてはいけない。

観光客の数が全国最下位、という不名誉な記録を更新するA県（自殺率ならぶっちぎりだ）に生まれれば、危険に飛び込んで娯楽に興じたくもなる。言い訳にもならないが。

ユウと会うのは学校が終わった後、放課後から夜の時間と決めた。待ち合わせ場所は、例のファーストフード店になることが殆どだ。放課後デートと言えば聞こえがいいし、まあ周りにもそう見えていることだろう。ちょっとだけ鼻が高い。

ユウの方は思い立てばいつでも出かけたいたようだが、さすがに学校を毎日さぼってまでの暇つぶしはデメリットが大きすぎる。

小さな体に不釣り合いな、Lサイズのコーラをぐびぐびと飲みながら。

「幹は未来への覚悟が足りないんだ」

ユウは頬を膨らませていた。

「目立たず慎重に探さないと、見える物も見落とすぜ。それがフラグ探しってもんだ」

「フラグって何？」

ユウはしつこく訊いてきたが「物語における伏線みたいなものだ」と説明したら納得したようだった。していいのか。

「ハッピーエンドを目指すなら、地道な伏線の積み重ねが大事なんだよ」

「なるほど。幹は色々詳しいな。参考になる！」

取るに足らないデマカセで、頷かれる気分は悪くないけれど。

「でも私達の努力は物語ではなくて、現実のことだよ。そこを忘れないでよ、幹」

奇妙な所で冷静に返してくるのが玉に傷だ。冷める。

実際に、物語———というかゲームなら、俺は得意分野だ。エンディングが一本だとして至るルートがたくさんあるのだとしたら、一つ一つのフラグという宝玉を拾うように情報を探して、埋めていけば良い。

現状分析を怠って無茶なクエストに挑み、いきなり大きなイベントをこなそうとするのは無謀だ。ユウが逮捕でもされればその時点でゲームオーバー、未来の消失。

『フラグ・ロスト』だ。

「私達の現実はゲームでもないよ、幹」

ユウは面白くなさそうにしながらも、納得していた。

毎日のように帰りが遅い甥っ子に対しては、叔父も心配を隠せないようだった。

ずっと引きこもりだったのだから、突然行動的になった俺を不安に思われても仕方ない。

「昔のクラスメイトと会っているんだ」

とだけ説明したが、叔父は俺が悪い友達に誘われて、暴走族にでも入ったのではないかと危惧している。A県では今も暴走族が各地に偏在し、権力に抵抗活動を行っている。

「何か事件に巻き込まれてる、なんてことは無いのかい？」

会社でもなめて見られる童顔で細面の叔父は、家庭の平穩の維持に固執している。

『実は妄想メンヘラ少女とフラグ探しをしています！』

だなんてさすがに口が裂けても言えない。多くを語らない俺に叔父は、

「とりあえずインフルエンザが流行っているらしいから、うがいと手洗いは忘れるなよ？」

小学生にでも諭すように、毎晩注意してきた。

今まで反抗期すら無かった俺だし、本気で心配させるのも親孝行というものだろう。

そういうことにしておいて欲しい。

＊

数日後の夜中。俺とユウは、ファーストフード店から自転車で三十分ほどかかる場所にある、小さな神社にやってきた。

到着したのは、よりもよって丑三つ時の午前二時。片手に持った懐中電灯の明かりだけでは、不気味さは誤魔化しきれない。

「さあ行くぞ、幹」

張り切るユウは巨大なシャベルを背負って、鎮守の森の奥深くへと進入していく。

「はいよー」

俺もシャベルと、ずっしり重いリュックサックを背負ってユウに着いていく。

とびきりの珍入者である俺達だが、この神社に祭られた神様は抗議一つしてこない。俺達の目的が読めずに、神も困惑しているのかもしれない。『来世のために情報を残させて下さい』なんて祈願されたら、俺が神様でもスルーする。

「うん、これだよ幹」

ユウは森の奥の大樹を見上げていた。この小さな神社のご神木で、太い注連縄も巻かれている。俺とユウの二人で手を伸ばしても届かない程――ではあるが、正直言ってそこまで大きくはない。よくテレビで見る屋久島の原生林の方が壮観だ。

しかし、目を輝かせているユウによると。

「この木は、未来までずっと残ってるんだよ。もっともっと大きくなって、逞しくなって森の主みたいになってるけど。注連縄の切れっぱしが、木の幹の上の方に残ってたんだ」

とのことらしい。

「確かに訊いた話と位置関係は同じだな。ここは山の上だし、津波やら何かの天変地異があっても被害は少なそうだ」

「うん！ 妥当な場所だし、未来の人達にも分かりやすいだろ！」

喜色満面、得意気なドヤ顔。誉められた子犬かよ……悪くないけど。

「じゃ、早速取りかかるか。見つからない内に終わらそう」

俺がシャベルを振りかぶると、ユウも「おー」と頷いてシャベルを構えた。

無遠慮にご神木の根本にシャベルを突き立てた俺達は、しばし無言で、されど手早く土を掘り返し始めた。掘って掘って、滝汗が出ても掘りまくる。

真夏のまっただ中、夜になっても十分な熱気だ。この辛苦にどれだけの意味があるんだろう。しばらく経って、小休憩に入ったユウを見て俺は思う。

土まみれのユウは託しあげたシャツの裾で顔を拭いながら、乱れた息を整えていた。

「幹、さすがに体力あるなー……私は駄目だあ。未来で少しは生きるための技術を学んだけど、こっちではあんまり役に立たないし……暇つぶしに、未来の知識で工作するぐらいだもん。カマルと違って、この時代の女の体はガタがきやすいしなー」

自分が女である、ということ客観視しているらしい。大量の汗で濡れた透過したシャツが、ユウの体の輪郭と下着の形と肌の色にくっきり浮かべている。ヘソが丸見えだ。

前言撤回。ここまで来た意味は充分に、存分にあった。

「写メを撮らせてくれ」

「……何で？」

「すまん何でも無い」

ユウが不審そうに見てくるので、穴掘り作業に俺は戻る。掘る→チラ見→掘るの流れで目に焼きつけることにしよう。これだけのことで、どんな苦行も耐えられる気がする——そんな自分が残念だった。

やがてユウも復帰して、掘り続けること約三十分が経過した。

地面には、人が一人すっぽり隠れられるぐらい縦長の穴が穿たれている。

「よし！ もういいね。幹、あれを埋めよう」

「了解」

俺は穴の外に置いておいたリュックサックの中から、厚い金属製の箱を取り出す。ナッツ型で俺の頭よりでかい。ネットで購入した、タイムカプセル用の箱である。

中には複数のファイルが入っていた。水の濾過方法や食べられる野草など、孤立しても安心なサバイバル術について書かれたファイル。現代から未来の世界に至るまでの地形の推移から予想した、水源の場所を記したファイル、などなど。

ユウと俺が二人で相談して作成した、未来に役立つ情報セレクションである。

勿論それらは全て、ユウが手書きで未来の言語に『翻訳』している。

「未来の奴らは、ちゃんと役立ててくれるんだろうな？」

ユウの妄想に合わせて言ったつもりが、少々白々しくなってしまった。

怪しまれたかと思ったが、ユウは気づいていない。

「きっと気づいてくれる。未来で、私がここの地面を掘ってみるよ。まだあったら誰かに渡して広めてもらうけど、無かったら誰かが見つけてくれたってことだ。そっちの可能性を、私を信じる」

ユウは希望の溢れる力強い眼差しで見つめながら、タイムカプセルを穴の中に置いた。

俺はユウと頷きあってそれに土を被せていく。きっちり穴を埋めて足で踏みしめて固める。カモフラージュに小石などをばらまいておいた。

「これでいいね。今日はここまでだよ、幹」

「おう。やったなユウ」

労ってはみたが。これが有効かつ最適な方法だとは俺は思っていない。金属だって腐食するし、中の紙だって悠久に近い時間には耐えられないのでは無いだろうか。

「幹が手伝ってくれたおかげだ」

俺の内心には全く気づかずに、ユウは笑顔で言う。

全身土まみれの美少女の微笑みは、貴重かつ享乐的だ。

自分の適当さに後ろめたくもなるが、俺に責任は生じようも無いのですぐにどうでもよくなった。過去ならまだしも、未来に後腐れなど無い。

一仕事終えた心地よい疲れに身を委ねて、俺とユウは帰途に就いた。

森から抜けて、人気の無い真っ暗な歩道に出る。そこで俺は奇妙なものを目にした。

「ユウ、ちょっと待て」

欠伸を浮かべながら自転車のペダルをこぐユウを、俺は呼び止める。早く帰りたいとごねるユウも、すぐに興味を惹かれた。

街灯の薄明かりの下で、何やら小さな生き物が蠢いていた。自転車を降りた俺とユウは、慎重に近づいてみる。

それは羽が傷ついて、飛べなくなった野鳥だった。

ぴよこぴよこと歩きづらそうに俺の方に寄ってきて、ぴー、と助けを求めるかのように鳴いてきた。本当に野生動物だろうか。やけに人なつこい。

「見ない鳥だね。喧嘩でもしたのかな？」

ユウはしゃがみこんで、その野鳥の動きに見入っている。種類は分からないが、羽毛は鶯色で美しい。怪我をしていなければもっと立派に、優雅に空を舞えるのだろう。

あまり体は大きくは無いのでそういう鳥なのか、成鳥になったばかりかもしれない。

「このままじゃ飛べそうに無いな。どうするユウ？ 拾ってやるか。それとも、未来には関係無いから置いていくか？」

名も無い野鳥の頭をそっと撫でてやりながら、俺はちょっとユウを虐めてみることにした。これも未来のことに比べれば小さなこと、とユウは残酷に切り捨てるのだろうか。

「拾ってあげよう、幹」

ユウはぼそりと答えた。お。意外だ。

「さすがのお前も弱った生き物は見捨てないんだな。この時代のことも考えてるのか」

「安全な場所で繁殖させれば、未来までこの子の子孫が残ってくれるかもしれない。そうなれば食料源として貴重だよ、うん」

ユウは深慮して、自分を納得させるように頷いた。こえーよ！

「そんな理由で、弱った動物を拾う奴初めて見た！」

そこまで妄想に徹底して従うか。俺はユウの本気具合に、改めて恐れを抱いた。

ユウは俺のツッコミを無視して、

「幹、リュック貸して。私が持って帰るから」

こちらを見ずに言い放つ。無言で俺はリュックサックを渡した。

ユウは無造作に受け取ってジッパーを開き、野鳥に手を差し伸べる。

自分の子孫の運命を知ってか知らずか、野鳥はちょっと躊躇いながらもユウの手の平に乗った。ユウは「大人しくするんだぞ」と人質を脅す強盗のようなことを言って、野鳥をリュックの中

に慎重に入れて、ジッパーを締める。手早い。

「……ユウ、お前が食うんじゃないよな」

「『現代』の私は、そんなに飢えてないよっ！」

ムキになってユウは怒鳴る。

「そ、それならいいけど……」

まあ、今生では生き延びられるのだ。この野鳥も文句はあるまい。

その後も俺達はファーストフード店で待ち合わせをしては、いくつかのクエストに挑んでいた。

ユウの作戦は毎回過激だった。未来に情報を『刻む』という意志が強すぎるせいか、国民の血税で作られた公共物の破壊、という行為を伴うことが多いのだ。

ある時は小学校の校庭に忍び込んで初代校長の銅像の背を彫刻刀で削り、未来文字を掘っていた。すぐバテて修復されるだろう、と思ったが何の騒ぎにもなっていないらしい。教員も生徒も、もうちょっと初代校長に興味を持ってあげて欲しい。夜中に血の涙を流されても知らんぞ。

毎度毎度スリリングにも程があるので、俺はもっと安全なクエストを考案しなければならなかった。フラグは危険なことをすれば立つものではない、と分からせなければ。

まず俺はユウに未来の世界の印象を詳細に訊いて、地層がどのように変化していくのかを推察してみた。素人判断の出鱈目だが、それっぽく考えることは不可能ではない。

RPGでダンジョンのトラップを一つ一つ、慎重に回避していく感覚に近い。

今日は未来に人目に触れることを想定して、海岸に近い高台に向かうことにした。

未来でもこの地形は原型を残しているらしいが、一部が隆起して断層がむき出しになっているのだそうだ。

それを訊いた俺はユウといくつかのタイムカプセルを購入して、岸壁の地面を掘って埋めまくることにした。

「全部が無事に残るとは限らないが、いくつかは発見されるかもしれないだろ？ 化石とか弥生時代の貝塚みたいによ」

堅い土や石をほじくって、遺跡を捏造する考古学者のように、俺は情報を埋めていく。

「なるほどー。石像とか石碑とか、物に彫り込むんじゃなくて、地形の変化を計算するんだね。幹はすごいな！ 参考になる！」

ユウも感心しながら小さな手で土をほじくり、何とかタイムカプセルを埋める。彫刻刀よりは、スコップやシャベルの方が怪しまれないし健全だ。死体を隠す訳でも無いし。

何組かのカップルが不審そうに見てきたが、気にしない。俺もタフになった。

「……これが見つかったら、スズメにも自慢出来るかな」

木訥に、ユウは呟いた。

「またスズメちゃんかよ。そんなに可愛いのか？」

「うん。髪が金色でふわっと長くて、目はルビーみたいに大きくて、赤くて。声なんか鳥のさえずりみたいだよ。まるで天使なんだ」

「それはまた、ベタな美少女描写だな……」

中学生時代のユウともまた違う、王道ヒロイン中世ファンタジー編だ。名前からして日本的少女を想像していたが、違ったか。

「スズメは、倒れてたら赤ん坊も動物も病人も放っておけなくてさ、触っただけで怪我も病気も治せてさ……」

「はいはい。何回目だよ、その話」

俺はユウの未来ノロケ話に辟易していた。

曰く、スズメは誰にでも優しい。スズメはユウ＝カマルにしか頼らない。

スズメは何でも治す。スズメはどんな能力者より大切だ。スズメは誰よりも可愛い。

「何度でも私は出来るよ、幹。今日もベッドの中で私はスズメに会うからね」

激しく誤解を生みそうな発言を、何の屈託も無く言うユウ。

「お前は未来と、そのスズメって子のことしか頭に無いんだなあ……」

苦笑しながら俺が述べると、ユウは「当然だよ」とにっこり笑う。

空想上の恋人もいいが、俺だってここで努力してるんだ。などとは勿論言えない。

妄想に嫉妬するのは馬鹿らしいし、嬉しそうな人間に水を差すのもどうかと思う。

そもそも文句を言うのは筋違いだ。俺の方は最初から暇つぶし目的で、ユウの話など欠片も信じていなかったのだから。

その時点では。

*

その日は太陽が高かった。夏も終わりが近づいたが、まだまだ照りつけてくる日射しは暑い。沈みきる前にクエストを終えられたので、まだ時間的に余裕がある。

俺達は海岸沿いに建つ小さな個人商店に立ち寄って、スティック型のアイスを買うことにした。俺はチョコ、ユウはシンプルなバニラ。

食べながらのんびりと歩いていると、真っ赤な夕焼けが日本海側の水平線を染めているのが道路からも見えた。海面が星雲のように煌めいて、心地よい潮風が漂ってくる。

「確か、この付近の海は干上がっているんだっけか？」

俺は呆けたように呟いた。ユウの話では、未来では海水の量が極端に減っているらしい。

「うん……そう……」

何やら考え事でもしていたのか、ユウは胡乱な目で水平線を見つめていた。白い肌がオレンジに染まって、一幅の絵画のようだ。またしても俺は見取れてしまう。

嵌ると危険だと分かっているのに、こいつの遠くを見る視線はあまりにも蠱惑的だ。

「幹……やっぱり、私は君をずっと前から知っていたよ」

唐突に、ユウは語り出した。

「中学時代のことか？ だから会話は無いって。人違いだろ」

「いや……これは、カマルの記憶みたい。記憶やイメージが混ざっていたんだ。漠然とだけど、カマルの中には元から、前世の――ユウとしての私の記憶が残っていたみたいだ。今見ている夕焼けを、海が無いはずの未来でカマルは覚えている……君と一緒に見たことを、カマルは知っている」

「そいつは嬉しいな。けど、カマルにとっちゃ取るに足らない思い出なんだろう？ 未来に比べれば、小さなことだしな」

適当な返答。何もかも語調を合わせていたら、こっちもおかしくなる。

「いや、カマルにはもっと幹の記憶が……あれ？」

ユウは、海の向こうから空に視線を移し、懊悩しだした。未来の自分の記憶を辿っている——つもりなのだろうか。無意識の名演技だった。

「で？ カマルくんとしてのお前は、俺のことをどう思ってるんだ？」

「わ、私は……あれ……？」

ユウは立ち止まった。視線が泳ぎ、狼狽している。

溶けたアイスが、ユウの指を伝って垂れていく。俺は何故か、それを目で追ってしまう。

「おい、どうした？ 何かあったのか」

「な……何でもない！ か、帰ろう！」

ユウは胡乱だった目をしばたかせながら、いそいそと歩いて、先へと行ってしまった。

俺はしばし啞然としながらもユウを追いかけたが、何故かだんまりを決め込んだユウは、それっきり返事もしてくれなかった。勘に障ることも言っただろうか？

仕方なく俺もそのまま帰ってしまったが、どうも釈然としない。

全くもって、メンヘラは己の妄想の中だけで生きている。さすがに疲れてきたなあ。

*

翌日の夜中。

いきなり叔父が俺の部屋のドアをノックして、「幹、助けてくれ」と情けない声を出してきた。悪寒と鼻水が止まらないらしい。俺はタクシーを呼びつけて、叔父を連れて急患受付に向かった。

診察結果は、インフルエンザ。陽性。

あれだけ毎日俺に気をつけろと言っておいて、このザマである。予防接種も受けていなかったようで、世話が無いたらありゃしない。

俺はユウに電話して、二～三日の間はクエストを休ませてもらうことにした。叔父の看病をするためだ。早く元気になってもらわないと、俺まで食いつぱぐれる。

また電話口で未来への覚悟だの何だのと文句を言われるかと思っていたが、ユウは。

「そっか。私も手伝おう」

一言告げて、がちゃりと電話を切った。

何の冗談だろう。

——と思っていたら、ユウは翌日の放課後に、俺の家にやってきた。

場所は知らせてはいたが、家に入れたことは無かった。俺は玄関前に立っているユウの姿に、思っきり狼狽してしまった。女の子が訪ねてくるなんていつぶりだ。

嘘です。同級生の女の子が家に来たのは初めてです。

「やあ、幹。夕飯を作ってあげよう」

スーパーの袋いっぱいの食材を両手に持って、ずかずかと入ってくるユウ。

止める理由は無い。無いが。

「どういう魂胆だユウ？ こんな無益なことしても、未来には何も残らないぞ」

「どういうって……一人じゃ看病も大変だろうし」

「まさかお前、俺の家族まで餌づけして、繁殖させる気じゃ？」

「カ、カニバリズムは未来でも禁忌だよっ！」

憤怒の形相で叫ぶユウ。法律は破っても文化人類学的なタブーは守るのか。

キッチンに案内したら、後は勝手にやってくれた。手伝うと申し出たが、いいから休んでろと命じられたので従う。

妄想メンヘラの料理はどんなびっくり箱なのだろう？ スネーク系かインセクト系のサバイバル料理だろうか。叔父には悪いが、不謹慎な期待が高まる。

一時間後。居間で待っていた俺の前に出てきたのは、ごく普通のお粥やポトフ、ポテトサラダなどの家庭料理だった。ユウはそそくさと皿を並べていく。

「あまり凝ったものは、作れなかったけれど」

……似合わねー。

中学時代ならまだしも、今のユウがこんな堅実な料理——と思ったが、スパッツ、純白のネクタイシャツの上にエプロン、という少々変則的で反則的な美少女描写の前には、些末なことである。是非とも目に焼きつけておかなければ。

叔父も並べられた料理以上に、突然やってきた息子の女友達に感激したようだった。寝込んでいたはずなのに飛び起きてきやがった。

「幹に、こんな美少女の友達がいたなんて……」

本人を前に、堂々と述べる叔父。血は繋がっていないのに、さすが俺の叔父。

「四方田です。幹くんには、いつもお世話になっております」

ユウは不器用な愛想笑いを浮かべて、無難な普通の少女を装う。最近ようやく周りを見ずに自分を省みない過激さが、鳴りを潜めてきた気がする。

叔父がにやにや笑いながら、俺の耳元で囁いてきた。

「幹、お前もやるじゃないか。どうしようも無い引きこもりオタのお前も、やることはやってるんだな」

……言い草がひでえ。

「本音が出すぎだろ叔父さん。ユウとはそんなんじゃねーよ」

「私がどうかした？」

ユウは食器にサラダを盛りつけながら、不思議そうに訊いてきた。

「何でも無いです」

俺と叔父は二人揃って首を振る。

「あはは。良く似てるね、幹と叔父さんは」

心底楽しそうにユウは笑う。未来や来世関連のこと以外で、ユウが笑っていることは珍しい。何度も会っているなのに、未だ知らない表情が多い。

「本当に悪いな、ユウ。家庭のことでお前に世話になるなんて予想もしてなかった」

「気にしないで。スズメの病気を看病することも、あっちではよくあるし」

「そういえばスズメちゃん、自分の怪我や病気は治せないんだったな」

俺とユウのやりとりを、叔父は鼻をかみながら、怪訝そうに眺めている。

「……スズメ？ なんだいユウちゃん、野鳥でも飼ってるのか？」

「あ、はい、まあ」

あやふやにユウは答えた。野鳥は飼っているのだから嘘では無い。未来の食料庫扱いで、スズメでも無い謎の鳥けれど。

そういえば名前もつけていなかったな。

なんだかんだで楽しい食事が終わった。二人が三人になるだけで、会話のパターンがこうも増えるだなんて思ってもいなかった。シルバのポジションは俺と叔父にとって、とてつもなく重要な潤滑剤だったんだろう……ユウがペットという意味では無い。

病人とは思えないほどの旺盛な食欲で満腹になった叔父が、処方された薬を飲んでいる。白く小さな、よくある錠剤だ。

のんびりとお茶を飲んでいた俺は、ユウがその錠剤を値踏みするように凝視しているのに気づいた。叔父もすぐに気づく。

「四方田さん、どうかした？」

「い、いえ……その、薬の数字が……」

ユウが見ていたのは、叔父が飲んでいる錠剤に刻まれた製造番号だったらしい。巨大な製薬会社のものである。

「この薬に問題でもあるのかい？」

叔父は娘を心配するような目つきである。

「未来に、それが……」

何かユウは言いかけたが、ユウは深刻そうに口をつぐんだ。顔が真っ青になっている。「ユウ、大丈夫か？」

「幹……明日、大事な話をする」

「お、おう？」

低く重いユウのウィスパーボイスに、俺の声は逆に上擦った。

嫌なフラグが、立った予感がした。

*

ユウが帰って、叔父はぐっすり眠ってしまった。無理をしていたのかと思ったけれど、俺に女友達がいると知って安心したようだ。未来の話はしないでおこう。

俺は自分の部屋で、デスクトップのPCの電源を入れた。すぐにブラウザで、巨大掲示板を開く。しばらく前に、俺は一つの画像をいくつかのスレッドにアップしておいたのだ。

ユウが幾度も彫刻刀で刻んできた未来文字を、携帯電話のカメラで撮った画像。

俺はユウの未来文字を、ネット上で晒したという訳だ。

最低な行為だと思われるかもしれないが、むしろ逆だ。俺は俺で、適当な自分の在り方に嫌気が差してきていた。ユウの妄想に法則があるとすれば、ある程度は知っておきたい。無いのなら、それでいい。付き合い方の指針にしたい。

期待していたのは、誰かが出した暗号に他の誰かが答える、という知的なゲームのような空間のスレッドだったが、何日か経っても俺がアップした画像にレスはつかなかった。

画像だけでは検索が難しいのだろう。諦めかけていたが、俺は別のスレッドで自分宛てのレスを見つけた。そちらは、都市伝説などを語る手広いオカルト系のスレッドだった。

常駐しているらしいマニアの住人が、書き込んだらしい。

『その文字、お前が考えたものではないな？ 高度なエスペラント語にも似た、独自の用法と文法を持った未だ現れていない言語だ。驚くほど理論的に構築されていて、一朝一夕で考えられるものでは無い。どこで見つけた？』

真面目ぶった、大仰な文章だった。一読しただけでは信用出来なかったが、スレッドの住人からすると、そのマニアは幅広い人脈と知識から一目置かれているらしい。

それだけで、この書き込みを真に受けるのもバカバカしいが。

ユウが迷いもせず、同じ文字を毎回書いていたのは事実だ。リズムがあり、文節があり、書き損じがあり——朝一夕や勢いで書けるものでは断じてないと、俺も感じていた。

妄想だけで、そんなことが出来るのか。適当な物でないとしたら……？

ユウの話を信じたりする訳ではないが。

未だ、現れていない言語。

ソースも無いその書き込みの一文に、俺は喩えよりの無い焦慮と、恐怖を感じていた。——俺はここら辺でユウとの関係に、一区切り付けなくてはいけないようだ。

*

翌日の放課後。ユウのポテトとコーラは、一口分も減っていない。

いつものファーストフード店の二階席。ユウはこの世の終わりのような悲壮な表情で、テーブルを見つめていた。先日の顔の青さがより深くなって、最早藍色だ。

席に着いた俺を見て、ユウが深いため息をつき目尻が下げる。安堵したようだ。

「良かった、幹。来てくれたんだ」

「大事な話があるんだろ」

神妙な顔で、ユウはこくりと頷く。

「昨日、幹の叔父さんが飲んでた、インフルエンザの薬があるよね……あの薬、未来で見たんだ。正確には、あの薬の商品名だけだ」

「未来でも、インフルエンザが流行ってるのか？」

「違うよ。未来ではあの薬の商品名は、奇病をもたらした悪魔の名前として知られている」

「あ、悪魔あ？」

「うん。昨日帰ってから、カマルとして、未来でもう一度確認してみた。間違いない。向こうの時代では、致死率がとっても高い、新しい病気が長年に渡って人類を苦しめている。治療法は見つかっていない。スズメの能力も追いつかないほどの……」

未だ現れていない、奇病。

「でも、この時代ではまだ生まれてもいないんだろ？」

「その奇病を生んだのは、人間なんだ。昨日、幹の家で見た薬……あれが、後の時代になって、動物から感染したインフルエンザウイルスと反応して変異させたんだと……」

「……俺はウイルスの専門家じゃないぞ」

「とにかく。あの薬が原因で、未来に死の病が生まれるんだ。分かるだろ？」

分かるだろ——爛々とたぎる目で、ユウは俺を見つめている。

「……………分かんねーよ」

淡々と俺は告げた。怪訝そうにユウは首を傾げる。

「そっか、私の説明じゃ難しいかな？　とにかく、あの薬を作ってる会社に説明出来れば」

「あー、悪い。俺、最初から信じてないんだ、お前の話」

「え……？」

「本当にすまん。けどさ、未来とか来世なんて簡単に信じる方がどうかしてるだろ？　暇つぶしだったんだ。お前、見た目可愛いしさ。友達面してると、なんつーか……彼女が出来たみたい
に錯覚出来るしさ」

「……………幹？」

冗談めかした笑みを浮かべて、ユウは潤んだ眼差しを向けてくる。

「お前の——」

俺は、ユウから目を逸らして。断言した。

「お前の妄想には、もう付き合えない。だから、これからは普通の友達ってことじゃ駄目かよ？

たまに会って話すとかなら、いくらでも付き合うからさ」

「……………ただの、友達？」

ユウはしばし、愕然としていたが。

突然席を立ったかと思うと、弾けるように走り出して店を出ていった。

これでいい。俺もあいつも、大人になる前に解放されるべきなのだ。

陰鬱とした気分だった。A県内陸のじめじめとした空気が、肌にまとわりついてくる。季節の割に肌寒くもある。

ユウと別れて家に帰った俺はまだ咳の止まらない叔父の看病をしてから、早めに床に就くことにした。ひどく疲れていた。

「ユウちゃんは、今日は来ないのかい？」

無邪気に訊いてくる叔父に、俺は苦笑いで返すしか無かった。

毛布を被って浅い眠りに落ちた俺は、不思議な夢を見た。

荒廃した――あらゆる建築物が砂に埋もれている、俺の町。かろうじてそうだと分かるのは、荒地にぽつんとある石碑や、森の中に高くそびえる大樹に見覚えがあるからだ。

大地はひび割れ、空を氷霧のハリケーンが覆い、人々が嘆き悲しみながら彷徨する。

その中にたたずむ、金色の少女と――

その傍らで少女を庇うように立つ、小柄だが精悍な体躯の少年。

二人は苦悩に満ちた眼差しを人々に向けながら、荒れた世界を進んでいく。その先には荒れた大地しか無いというのに、少年は迷わず少女の手を引いて先導する。

少年の目に宿る希望の光は、幹がよく知る者と同じ光だった。

俺には関係が無い。二人に叫ぶ。

俺は関係無いんだ。反応は無い。

未来は答えない。未来は変えられない。全てが見えているのに何も出来ない。

こんな――こんな世界をずっと夢に見るなんて。とてもじゃないが耐えられない。

夢の中で、俺はひたすらに逃げ場を探した。

＊

翌早朝。俺をその悪夢から醒ましたのは、一通のメールだった。

『件名 幹へ』

ユウだよ。昨日君に言われたこと、とてもショックだった。だけどあれが君の本音なら、私は信じてもない君を、ずっと巻き込んでいたことになるね。ごめん。

私はこれから、あの製薬会社のA県支社に行ってみる。大きな会社の小さな地方支社だけど、あそこの研究施設では、あの薬の研究開発を行っているらしいんだ。

もし、何も話を訊いてもらえなかったら。

私は、覚悟を決める。ちまちまと未来に情報を残すのも悪くないけど、スズメのために、もっと重要なことをしておきたくなったんだ。

未来に、悪魔が生まれないように。そのためならどんなことだって出来る自信がある。

私がいなくなっても、気にしないで欲しい。カマルは未来で、元気にやってるから。

もし、幹がいつか、私の話を信じてくれたら。もし、未来のために残せる情報があると思ったら。そのときはよろしく。幹といて、楽しかったよ。

P.S. あの野鳥のことも、よろしくね。』

慄然とした。

……バカが。あの妄想メンヘラバカが。何だこの超展開は？

このメールはきっと――世界でただ一人、俺にしか通じないテロ予告だ。だから嫌だったんだ。こうなる前に縁を切っておくべきだった。関係無い。見なかったことにしよう。会わなかったことにしよう。俺はぶつぶつ言いながら、居間で着替え始めていた。

――なんでだ？ またかよ。日常に戻れよ、俺。

物音に気づいて、寝ていた叔父が様子を見に来た。

「幹、出かけるのかい……？」

「うん、ちょっとユウに会いに」

「そうか。気をつけて」

神妙そうな顔の叔父は、俺を止めようとはしなかった。咳をしながら超然と、俺の目を見つくる。

自覚してはいなかったが、俺はただならぬ気配を発していたようだ。

「叔父さんは、自分の大切な人が目の前で生まれ変わろうとしていたら、どうする？」

「それは、人として努力して、自分を変えるという意味かな？ それとも……」

「あんまりポジティブじゃない意味かな、俺にとっては」

「なるほど。なら答えは簡単だね。病気だろうと事故だろうと、やれることをする」

「……叔母さんの時も、そうだった？」

「勿論。どうしようも無いこととはいえ、今でも暴れたくなるほど悔しいさ。けれど幹がいるから、今まで耐えられた。シルバがいなくなった時は、堪えたけどね」

「うん……あれは堪えたなあ」

止められるなら止めた。普通の日常は、守り続けることでしか築けないんだろう。

「何があったか知らないが、また、ユウちゃんと一緒に夕飯を食べよう」

咳き込んでよろめく叔父に向かって頷いて、俺は家を飛び出した。

*

玄関を開けた途端に、俺は飛び上がりそうになった。

ぴい、というフルートのような音色。ドアの前にぽつんと朝日を浴びて、あの野鳥が入った鳥カゴが置かれていた。

「あのバカ……ひょっとしてさっきまで俺んちの前にいたのか？」

独りごちて、俺は小さなカゴの中の鳥を見やる。

丁寧に折り畳まれた翼は、一部羽毛が乱れてはいるが、動きづらそうには見えない。あのときの怪我はすっかり完治しているようだ。素人ではここまで治療は出来ないだろう。

ということは、ユウはわざわざ獣医の所まで出向いたということか。鳥カゴも新品、水も餌も十分な量が入っている。何が食料だよあいつ。

「お前、ここから出たいか？ 俺、ひょっとして無事には戻れないかもしれないから。飼ってやれる保障は出来ないんだ」

語りかけると、野鳥はぴいぴいと嬉しそうに鳴いた。

よし分かった、と俺はカゴの入り口を開けてやる。どこにでも好きな場所に行くといい。だが、ぴい、と一鳴きしたそいつは、俺の肩に停まって盛んにぴいぴい鳴き出した。急げ、と行っているような。思いこみかもしれないが、そう聞こえた。

「お前もあいつを追いかけたいか？ 一応恩人だろうしな」

ぴい、とそいつが鳴く。「急ごう、幹」と幻聴が聞こえる。

たかが名前も無い鳥の分際で、奇妙なほどに頼りになる。

*

冷たい午前中の風を切って自転車ですっ飛ばすこと二十分。道に迷うことは無かった。

今は携帯電話一つで、世界中のストリートを覗き見れる時代なのだ。

クリーム色の、工場のような外観の建物。某製薬会社の研究施設入り口に、俺は難なく辿り着いた。

周囲に神経を研ぎすます。騒ぎになっているような気配は無い。裏口から侵入したのでは無いか、とわざわざ回ってみてみたが、そちらは嚴重に鍵が閉まっていた。俺はしばし逡巡したが、堂々と入り口から正面突破してみることにした。

野鳥を胸ポケットに隠して自動ドアを開けると、すぐに受付の、垢抜けない若さの女性が形式ばった微笑を向けてきた。

俺はユウの特徴を詳細に伝えて、

「そいつ、妹なんですけど、先に来ているはずなんですけど……」

仰々しく訊いてみる。すると受付の女性は、

「ああ、先ほどお弁当を持って来られた――そちらの応接室で、お父さんをお待ちいただいておりますよ」

親しげに答えて、受付のすぐ近くの部屋を手で示した。

ユウめ、家族のフリをして研究員を呼び出したのか。安易な作戦だが、あっさり通りやがった。なんとゆるい危機管理意識だろう。本人確認もしないなんて、ザル警備すぎる。ウイルス兵器を開発している施設でもなし、内部に潜入するのでもなければこんな物なのだろうか。子どもだし。

まあこれなら、労せずユウを引きずって帰ることが出来る。

俺はへこへこと頭を下げて、応接室に向かった。

ノックもせずに、ドアを乱雑に開ける。狭い室内でセカンドバッグを抱えて、目の下に真っ黒な隈を作ったユウが、ソファに座っていた。

びくりと顔を上げて、俺の顔を見上げてくる。

放たれた窓の小さな隙間から、そよそよと秋風が頬をくすぐる。

「幹……！ どうしてここに？」

「自分でここに来るってメールしてきたんだろ？ 嫌なら、知らせてくるなよ」

俺はため息と謝罪をこらえて、ユウの隣に腰を下ろす。ユウは体をずらして遠のいた。

「知らせても来ないと思ってた……もう、会ってくれないと思ってた。信じてもないのに、ど

うして来たの？」

ぎゅっとバッグを抱き、ユウは目を伏せる。いじましい態度だ。これではまるで、俺が振ったみたいじゃないか。絡みにいったのは俺なのに。

「信じるとか、信じないとかそういう問題じゃ無かったら？ 知り合いがテロリストになろうとしてるのに止めなかったら、飯が不味くなる」

「テロ、か……そう見られるだろうね。でも、そう見られないと意味が無いんだ。ただの殺人だと思われないようにしておかないと。ここの研究自体に、偽りでもいいから、疑いの目が向くような——そういうやり方じゃないと」

「……ん？ 殺人どころじゃない？」

研究員を殺して自分も、とかそういうことじゃないのか。

「えーと……ユウ、お前が考えてるのは、いつもの彫刻刀を武器にして、研究者を人質にとって、とか……そういう、子どもじみた作戦なんだよな？」

「……………」

無言で目を伏せたまま、ユウはのそのそとセカンドバックを持ち上げた。ジジジ、と死にかけた蟬の鳴き声のような音を立てて、ジッパーが開かれる。その中には。

見慣れたタイムカプセルが入っていた。

「それがどうした。弁当箱のつもりか？」

「爆弾が入ってる」

さらりとユウは告げた。耳を疑った。

悪い冗談だ。冗談であって欲しいが、冗談を言っている顔では無い。ユウが冗談を言ったことなど一度も無いし……そうだ、ノリツッコミとか、そういう系統だ。

「……爆弾おにぎりか？」

「中身は、時限式の爆弾。もう10分ぐらいで起爆する。爆発の規模は小さいけれど、この部屋ぐらいなら……」

駄目だった。冗談じゃなかった。爆弾テロだった。ザル警備どころの話じゃねーぞ。

「な……な、なんで、お前にそんな技術があるんだよ！」

「カマルが知ってた……暇つぶしで作ってみたんだ。あっちでは土木工事に使う知識だったし、人を傷つけるのはスズメに禁止されてたけど……こっち側にはスズメがいないから」

以前神社に行った時に、暇つぶしで未来の知識で工作をしていた、と訊いた気がする。

よりによって爆弾だったのか。

「スズメちゃんはいなくても、警察がいるだろうが！ 人殺しはどこだってタブーだ」

「……未来に比べれば小さなことだよ」

ユウは口の端を上げて、自嘲するように微笑む。

胸の奥がぎりぎりとならんだ。こんな笑顔をする奴だっただろうか。俺がそうさせたのか。

「何も知らない人間を殺すことが、本当に小さなことだと思ってるのか？ ここの研究員の誰一人として、殺人ウイルスを造ろうだなんて考えていないぞ」

「順番が変わるだけだよ。多くの人を救える現実がこの先にあるなら、そっちのが重大だ」

ユウは淡々と告げて目を細める。違う。これは大きすぎる齟齬だ。そんなのは――。

「そんなことは――最低最悪のフラグロストだ」

「フラグロスト？ 違うよ。これは、幹が言った、大切なフラグ立て……」

「違う」

可能な限り声を低く重くして、ユウの言葉を遮った。

「どんなゲームでもマンガでも、フラグは主役が命を賭けて立てるもんだ。だが、命を捨てて立てられる旗なんか無い。そういうのはな、『死亡フラグ』って言うんだ。BADEND直前の、救いようの無い選択ミスだ」

「未来はゲームやマンガじゃ……」

「現実だからこそ、リセットが効かないんだよ。未来でよろしくやるだと？ カマルは、お前の記憶を受け継ぐんだろ。大勢の人間を殺して、自分まで殺して、そんな記憶を受け継いで、未来でどんな希望を守れるっていうんだよ？ 大体この時代に何をしても、歴史は変えられないって断言したのはお前だろ」

俺はたたみかける。ユウが狼狽し、目を白黒させる。何をしても変わらないのなら、死病を避けることは不可能、不可避なのだ。ここで失われる命に、意味など無い。

ユウは小さな体をより縮めて、床に視線を落とす。

「それでも……それでも、私は、わ、私は……」

迷う意味など無いってのに。

「この時代は、この時代の人間のものだ。今のお前も、その一人だろ！」

俺の絶叫に、ユウがびくりと肩を震わせる。シルバの時も黙って見送ってやったのに、俺を感情的にさせるとは、難儀なコミュ不全だ。

……違うか。他人の希望を自分の絶望の代替品にして、消費しようとしていたのは、俺だった。帰ったら、詫びなければいけないのは俺の方なのだ。

もう一押し、ユウの決意を揺らがせたい――俺が口を開こうとした時。

かつん、かつんとリズムカルな足音が、ドアの向こうから近づいてきた。

ユウの体が微動し、瞳孔が開く。

まさか、呼び出した研究員か？ 来るな。

このタイミングはまずい。迫り来る足音が、カウントダウンにしか聞こえない。

ユウは、荒い息を吐きながら。

「幹、私はここまで来て、何もせずに帰ることは出来ないよ……」

震える声で告げて、バッグの中に手を突っ込んだ。

タイムカプセルの蓋が、かぱりと開く。手の平サイズの、たこ足配線のコードが絡みついた物体。時限式では無いのだろうか。ありがちな秒針などは無く、ピンのようなものがコードの隙間から生えている。

「ゆ、ユウ……待て、それに触れるなよ！」

とは言ったものの、どうすればいい？ 俺が覆い被さって――いや鋼の体じゃあるまいし、意味が無い。手に持って逃げる？ どこに。外に？ 入り口はドア一つだ。

こつこつとノックの音。カウントゼロ。タイムオーバー。

ユウが、ピンに手をかけた。かちり、と無情な音。

駄目だ。諦められない。

俺は、ユウを諦められない！

意味など無いと分かっているながら、俺が爆弾に手を伸ばすと。

ぴい、と心の奥で鳴き声が出た。

俺の腕をロケットの発射台にして滑り抜けて――あの名前も無い野鳥が飛翔した。

見たことも無い速さだった。野鳥は、啞然とするユウの手元の爆弾のコードに嘴を引っかけて、その勢いのまま、窓の隙間に突貫する。

一瞬だったが。俺の脳裏に、はっきりと見えた。

フリスビーをくわえて、どこかに捨てに行く――かつての愛犬、シルバの姿。

何故、今？

ドアが開いた。ラフなシャツの研究員の中年男性が、

「絵里子、お前かい？ 弁当なら持ってきているんだが……」

間の抜けた声で入ってくるのと、ほぼ同時に。

窓の外で、轟音が響いた。真っ赤な爆炎の逆光が、室内を、俺とユウの背を照らす。

俺もユウも、研究員も、ぽかんとして窓の外を見つめた。

「た……大変だ！ 君達、すぐに逃げろ！ 爆発事故だ！」

動転した研究員はユウや俺の正体を詮索する余裕を一切見せずに、応接室の外へと飛び出した。人を呼びに行ったのだろう。眼前の少女が手製の爆弾を炸裂させた、などとは露知らず。

壁が焦げた匂いの向こうから、嬉しそうな、甲高いぴいぴいという鳴き声が飛んできた。

無傷の、あの名も無き野鳥が部屋の中を気ままに飛び回る。不死鳥かよ。

「こ、この子が、ど、ど、どうして……？」

激しく動揺して、立ちくらみを起こすユウを肩で支える。

その俺の手の平に――ユウの肩越しの手の平に自慢気に野鳥は乗ってきて、俺の顔を見つめてきた。俺は目を見張る。

幻覚だと、信じたいのだが。こんな超展開は嫌なのだが。

その野鳥の背後に、ゆらゆら陽炎のように揺れながら、しっぽを振るシルバの姿が、またしてもちらついて見えた。

現世にまた、シルバがやってきた。

俺以外の人間には、シルバの姿が見えていなかったらしい。

何が起きたのか、俺なりの推論は立ててみたが、超理論というか飛躍した推測しか出来ない。だからこれは、俺の妄想で世迷い言、ということにしておく。

生死に直結する力を持つという、未来の『テセウスの乗船者達』はいつの時代から存在するのか。

何故、ユウは生まれ変わったのか。

何故——シルバは生まれ変わったのか。

ただシルバと同じ芸を持つ野鳥、というだけでそう考えるなんて、逸脱した妄想と思われても仕方ない。でも、あれは、絶対にシルバなのだ。

シルバを弔った時、俺は確かに『何か』に触れて『何か』の声を聞いた。俺が無かったことにしていただけだ。ついさっきも俺は、シルバの移ろう魂にこの手で触れていた。

何故、生命が『俺の前で』生まれ変わるのか。

生まれ変わること。それ自体が、一つの力の現れなのだとしたら？

死を癒す力。見ただけで人を殺す力。

『希望を持って死んだ者を、未来に生まれ変わらせる力』。

能力の始まりは、ここにある、この力なのではないのか。

勿論妄想だ。妄想、だが。シルバを、自分の近くに生まれ変わらせたい、と願う者がいるとしたら。ユウを、未来に生まれ変わらせる者がいるとしたら。

全てを信じた上で、それをする者がいるのなら。そんなことをする人間が、自分の他にいるとは考えられない。灯台もと暗しも、いい所だ。

フラグを立てる、と意気込んで遊んでいた俺自身が、でかいフラグそのものだったとは。

歴史上、もしかすると初の『テセウスの乗船者』。

重要キャラすぎるだろ、俺。

*

物語はポテトに始まってポテトに終わる、いつものファーストフード店、窓際席、放課後。言ってみただけ。別段意味は無い。積み重ねが重要とはいえど、この世界には意味の宿らない情報もある。

残らなくていい情報は溢れているが、俺達が望もうと望むまいと残る物は勝手に残る。

この場所で二人の高校生が人類の未来の存続についての議論をしていた、なんてことは国連でも想像出来まい。されても困るが。

……今気づいたが、俺の内面って結構うざいな。これ、未来に必要か？

とりあえず、だ。夏は過ぎた。未来はともかく日常は勝ち取った。多分。

俺の前でSサイズに縮んだコーラをちびちび飲むユウも、何とか立ち直っていた。

暗いむくれっ面で、自分や他人の命を犠牲にして未来を立て直す無意味さをようやく分かってくれたようだ。

「せっかくい所までいったのに……幹のバカ」

分かってなかった。

「お前な……どれだけ危ない状況だったか、分かってるか？ 俺がお前の話を信じたから、止められたようなもので」

「あはは。冗談だよ」

目を剥いて叫ぶ俺に、ユウがはにかむ。だがすぐに暗い顔に戻って、またちびちびコーラを飲む。

「やり方が間違っているのは分かった。でも、たくさんの死人を未来で見てるから。あれを止められるなら何でもしたかったけど、やっぱり無理なんだろうね……」

拳を握りしめ、ユウは今にも泣き出しそうだ。

「お前は、身を持ってそれを知ってたんだろ？ 未来の世界だよ」

「うん……」

まだ思い悩んでいるのだろうか。ユウは顔を赤らめて俯いている。

「あ、あのね幹……私とカマルの記憶の中では、ぼんやりとだけど、私……み、幹とね」

「俺と？」

顔をのぞき込むが、ユウは俺の目を見てこない。

「え、えーとその……私ね、幹ともっと、ずっと一緒にいるみたい。そういう記憶が、あるの」

「ふうん……じゃあ、しばらくはお前は死なないってことじゃないか？ ってことはちゃんと、希望持って死ぬるんだよ、お前は！」

安心した。少なくとも、事故や事件で突然死んでしまう訳では無いのだろう。

「うん。しばらくは……というか、ずっと……」

蚊の鳴くような声でユウは呟く。聞き取れない。

「なんだって？ はっきり言えよ」

「な、何でもないよ！ ど、どうせ……この記憶が確かなら、未来は変えようが無いみたいだし……」

また、悲劇的な未来でも見えているのだろうか。

「変わらないなら、見えない部分に地道にフラグを立てるように、慎重に生きていくしか無いだろ」

それもきっと、意味のあることなんだろう。

「……そうだね。あの薬に関することも、未来に残せる対処法が見つかるかもしれないし」

頷くユウの表情には、もう悲壮さは残っていなかった。

俺は自分の推論を、ユウに話すべきか悩んでいた。

何しろ証明のしようがない。もし『生まれ変わりを操る』という俺のアホらしい力が真実のものだとすれば、俺はいずれ、ユウの死を看取ることになる。

それはそれで幸せなことと言えるのかもしれないが、俺はユウと一緒に旅立てない。

ユウは言っていた。

スズメは自分の傷は癒せない。能力者は、自分の命だけは操れない。

――俺は、ユウの世界には、生まれ変わらない。

俺がユウと一緒に生きられるのは、この時代の、このステージ上のみだ。

あちら側で、ユウはカマルという少年として、新しい恋に落ちる。他人、しかも女に奪われると分かっているのに、俺はずっとこいつを守っていくという訳だ。

まあいい。『まあいい』ばかりだけど。まあいい。

今は、この未来しか見えていない妄想家に、自分の方を振り向かせることに専念しよう。

希望を持って死んでいく人間と、これから何度も会える人生も悪くはない。俺が、そいつらの希望を未来に受け継いでやれる。

過去に縛られるのはたくさんだが、過去の力で未来に抗うのも、面白い。

面白い――妄想だ。こんな妄想は、仕舞っておくに限る。

来世まで仕舞っておこう。

一人で懊悩しながら不気味に苦笑していた俺を、怪訝そうに見ていたユウが。

「そうそう。ところで、あの子の名前だけどさ……」

楽しそうに身を乗り出してきた。顔が近い。こそばゆいバニラの香りが漂ってくる。

「ああ、あいつな。あいつの名前なら考えてあるぞ」

俺とユウの窮地を救った、あの名も無い野鳥。あいつも、俺達に取ってはすでに切り離せない、希望を持って生まれてきた家族なのであった。

「スズメがいいと思う！」

「シルバにしないか？」

同時だった。しばらく睨み合いになった。

その後、何日にも渡って俺達が揉め続けたのは言うまでも無い。

譲れない未来は、誰にだってある。

終